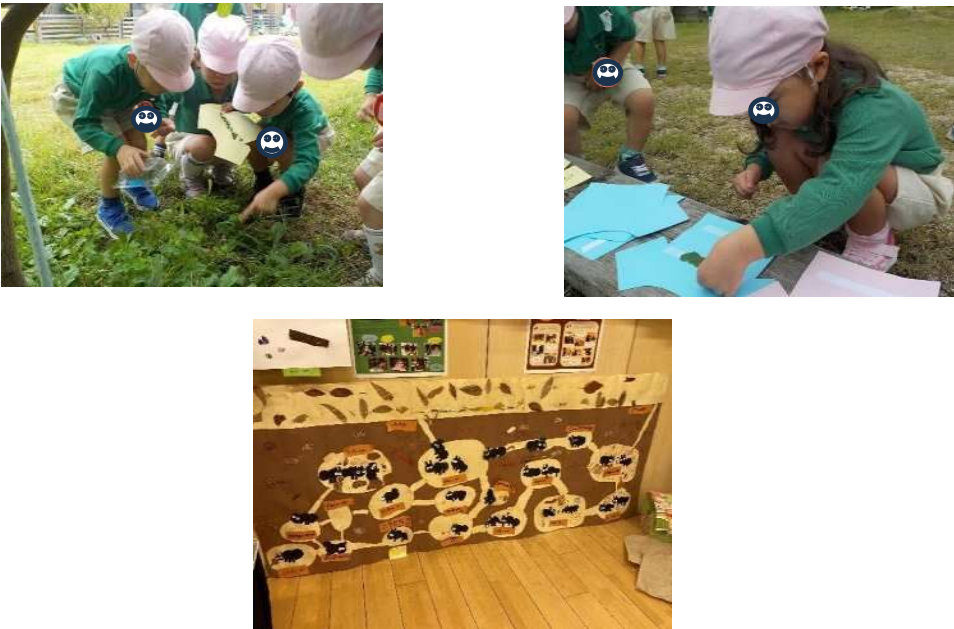
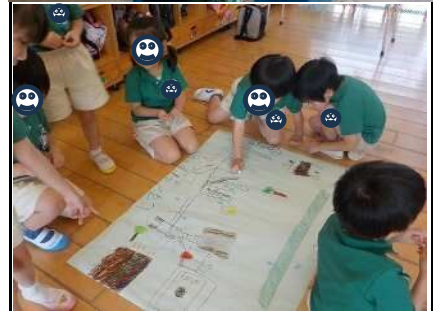


事業活動実績報告書

施 設 名	幼保連携型認定こども園葛飾二葉幼稚園		
教 育 理 念	「自立と思いやりの心」を育てる		
1 事業名	「身近な自然を保育に取り入れる」		
2 実施期間	令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日		
3 取組概要	（取組日） 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ○年間を通しての取り組み（目的） ・広い園庭を活用して、子どもたちが日常的（毎日）に身近な自然に触れ、五感を通して、感じる、気づくこと、それを土台に、友だち同士関わりを持つこと、表現すること、言葉が生まれること。 ・幼児（3、4、5歳児）クラス12クラス、乳児（0、1、2歳児）クラス全クラスが、年間を通して継続的に経験すること。 ・身近な自然素材を教育資源として捉えること。 - 自然は命を持っている - 自然は同じものがない いびつで均一でない - 自然は日々変化し、予定通り思い通りにはいかない - 自然は正解がない - 自然は優劣がない - 自然は五感力を引き出す - 自然は美しさと不思議さをもつ - 自然は生きる知恵を学べる		
	 		
	  		

3 取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ①乳児・幼児クラス (ねらい) 草花に親しみながら遊ぶことを楽しむ。 (活動内容) 草花を集めて障子紙に貼り、ペープサートを動かして歌を歌ったり、簡単な台詞をつけたりして楽しむ。 (エピソード) ・花を集める子ども、石・葉っぱなど、探索して自分の好きなものを集めていた。 ・枝が斜めに貼ってあったものを滑り台に見立てたり、葉っぱをベッドに見立てたりしながら遊んでいた。 ・ダンゴムシ・アリ・カエルなど、いつも以上に生き物に興味を持っていた。 (教育的効果) ・いつも以上に、草花に興味を持ち、色や種類にもこだわって選ぶ様子があった。 ・今まで草花を貼る遊びはしていたが、そこに物語を乗せることはしていなかったため、新しい形で楽しむことができた。 (教材) ・アリや蝶々のペープサートを用意したことで、会話をしながら遊ぶ姿に繋がった。 (場の設定) ・障子紙の配置場所を最初は中央に設定していたが、草花の位置から遠かったため、高橋先生のアドバイスではらっぱの端の方にも設定をした。 ・カラーボリを敷いたが、その上を走っていて危険だった。 ・篠竹のような固い棒。ススキがなっていたあたりに置いてあった。先が割れてとがっているため、鋭くて危険。持って走っている子どもが居た。転んだ時に目に刺さる危険。 (子どもへの対応・関わり) ・子どもたちと一緒に歌を歌いながら、色々な草花に目を向けられるように関わった。 ・帰り道にガルテンに寄れるようにしたことで、興味津々で楽しんでいた。 
	

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ③幼児クラス (ねらい) ・しずくだけでなく、雨や天気予報に興味をもつ ・予想をしながら、しずくが載るか載らないか自分なりに試すことを楽しむ (活動内容) ・絵本『あめはどうしてふるの?』を読んで、あめへの興味を深める。 ・葉や枝、石などの自然物にしずくは載るのか実験をする。 (エピソード) ・絵本を読んだときには、雲の名前やどのような雲がでたら雨が降りやすいのかなど、知っている子どももいることを始めて知り、その子どもの活躍できる場を知るきっかけになった。 ・絵本を読むと、「どうして水道の水は熱くならないんだろう。」という疑問の声も上がったため、子どものなぜ?を拾って活動を広げられるのだと改めて感じた。 ・前回、室内の身近なもので行ったという経験があったため、自分たちで考えたり、役割分担をしたりしながら進めることができていた。 ・前回の活動では、ただしずくを載せることを楽しんでいたが、葉の裏表両面を試してみたり、滑り台のように流してみたり、葉によっての違いを比べてみたり、主体的に活動に取り組む様子が見られた。 ・発表する場面では、ただしずくが載ったかどうかではなく、裏表の違いや、自分がどのような方法を試したのかなど、自分の言葉で伝えようとする姿が多く見られた。 (教育的効果) ・身近な自然現象を取り上げた絵本を読むことで、子どもの興味関心が一気に深まることを知ることができた。 ・色々な素材を用意することで、子どもの『試してみたい!』『これはどうかな?』という意欲を引き出すことができると感じた。 ・大人では出てこない表現の仕方をする子どももいて、表現活動にも繋がるのだと感じた。 (教材) ・葉でも、色々な種類の葉を用意したことでその違いを感じたり、なぜ違うのか興味を深めたりすることができると気づいた。 ・1人1つずつ全種類を用意した方が、より子どもたちがじっくり試して考えることができたと学んだ。 (場の設定) ・雨と雷注意報が発令されていたため、室内に自然物を持ち込んで行ったが、可能であれば戸外で行った方が、子どもたち1人1人が試してみたいものに試すことができたため、よかったと感じた。 (子どもへの対応・関わり) ・ただ行うだけでなく、予想をしてから行うことで、普段の園庭の状況を思い出したり、考えたりすることができ良かったと感じた。 ・滑り台のようにしたり、逆さまにしてみたりなど、面白い方法で試している友だちのことを取り上げることで、子どもたちが真似したり考えて新しい方法を考えたりすることができていた。 ・発表する時間を設けたことで、友だちの気づきに気づいたり、面白い発見を共有したりすることができた。
---	------	--



3 取組概要	(取組日) 令和7年7月 ～ 令和7年8月 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ④(ねらい)乳児クラス ・草花と水のうつくしい世界を楽しむ ・園庭遊びが難しい季節でも、草花を身近に感じ、親しみを持って自然遊びを楽しむ。 ・手先を使って、お玉やカップを使い、集中して遊び込むことを楽しむ。 (活動内容) タライに水を溜めて草花を浮かべてお玉ですくったり、カップに入れたり、草花を凍らせた氷をスロープで滑らせたりして、室内で草花と水の遊びを楽しむ。 (エピソード) ・普段は保育室を走り回るなどの危険な行為が目立つ子どもが、集中して遊び込んでいた。 ・様々なカップを用意したことで、子どもが自分で考えて遊ぶ姿があった。自分で選んだカップを使うことで、愛着を持って大切に使う姿が見られた。また、取り合いになることもなかった。 ・草花を摘む→凍らせる(準備)→遊ぶ の流れを一緒に行えたことで、子どもの中で一連のつながりを感じることができていた。 (教育的効果) ・高橋先生からアドバイスをいただいて、2グループ目の導入時に、より氷の冷たさを感じられるように伝えた。より子どもたちにとって、氷の冷たさを感じられたし、触りたい欲求を満たせたため、保育教諭からの話もよく聞く姿があったように思う。 ・普段、カップなどの容器を同じものを多く用意してトラブルが増えすぎないように準備をしていたが、自分のお気に入りを見つけることで、活動への集中力や遊び込む姿をより感じる事ができた (教材) ・様々な形のカップや容器の用意 …お気に入りの物を大切に使うことに繋がった。 ・水を溜めた大きめのタライを二つ、プール、机 …プールを使う機会が少なかった為、途中で片付けても良かった ・竹のスロープ …繰り返し水を流して遊ぶことができていた。 (場の設定) ・保育室にブルーシートを広げて、タライ、机、プールを置いた。場所を確保するためにも片付けられると良かった。 ・活動の終盤に、テラス側で透明シートに水を入れて、下から見て楽しんだ。その間に他の職員が保育室の片付けを行うことで、満足感を持ってスムーズに次の活動に移れたのではないかと感じる。 (子どもへの対応・関わり) ・R1 カップに水を満杯にいったことで、草花の気泡の浮き沈みに気付いた子どもがいた。その気付きに寄り添って、面白がる事ができていた。 ・子どもの発言から遊びが進展することができた。(竹のスロープを出した場面等)	   
--------	---	--

		(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ⑤乳児・幼児クラス (ねらい) ・手や足で泥の感触を楽しむ ・砂や水、泥の性質に気づき、試したり工夫したりする ・自分なりのイメージを広げ、作ったり見立てたりして遊ぶ楽しさを味わう (活動内容) さまざまな砂や土を使った泥遊び (エピソード) ・1回目の泥遊びでは、砂が手に付くことを嫌がり、遠くから眺めていた女児がいたが、繰り返し楽しむうちに、ままごとの玩具に興味を持ちコーヒーづくりごっこをしたり、自ら裸足になって泥が入ったタライに足を入れて遊ぶ姿が見られた。 ・ざるに砂を入れて水をかけると、大きな石だけがざるに残っていることに気づいた男児は、友だちに見せて知らせた。すぐに友だちにも遊びが広がり、「砂は水をかけると石に変身するのかな？」と疑問を持ちながら繰り返し楽しんでいった。 ・男児数名は、砂場に一つの大きな水溜まりを作り、海に見立てて遊んでいた。保育室では、友だちと一緒に遊ぶことで自分のイメージ通りの遊びができなくなることに抵抗感があり、場所や物の取り合いでトラブルになることが多い。しかし、泥遊びでは「水もってくるね!」「水を入れるから離れて!」「持ってきてくれてありがとう!」など、言葉で思いを伝え合う姿が多く見られ、友だちの存在を感じながらイメージを共有して遊ぶことを楽しんでいた。遊び方に決まりがない自然物だからこそ、のびのびと遊びを広げることができたのではないかと思った。 (教育的効果) 今までの遊びを思い出し、それぞれが好きな遊びに熱中する姿がみられた。砂絵では、筆に特別感を感じ、のりを塗ることを楽しむ姿が多くあったため、導入を丁寧に行い、砂絵の面白さを伝えることも大切であったのではないかと感じた。今後も定期的に砂場遊びを行い、子どもたちの遊びの変化に着目し、遊びが広がるよう環境設定をしていきたい。 (教材) ・裸足可 ・ままごと用玩具(やかんや鍋、お皿、コップ、スプーン等) ・水を入れたタライ 一つ ・タライに泥をいれたもの(泥のプール)2つ ・砂場には大きな山や穴、水の通り道を作っておく ・砂絵用 木のテーブル・画用紙・コピー用紙・水溶きのり・筆 ・バックやカップなどの廃材 ・葉やどんぐり、枝などの自然物 ・目玉シール ・大きなプラスチック段ボール (場の設定) ・砂絵を吊ることができるようスズランテープとクリップを用意し、外で飾ることができるようにする。 ・葉っぱやどんぐりなどの自然物や目玉シールを置いておくことで、見立て遊びのイメージが広がるようにする。 ・砂絵では、描いたものを表示するための吹き出しのようなものを用意し、描いたもののイメージを表現できるようにする。 ・水を入れたタライを用意し、水を汲んで遊ぶことができるようにする。 ・プラスチック段ボールは机の上に置き、泥を手で塗り広げたり、泥を使って指で絵を描いたりできるようにする。 ・回数を重ねるごとにままごとコーナー、泥のプール、砂絵等、段階的にコーナーを設定することで、様々な遊び方に気づき、楽しめるようにする。 (子どもへの対応・関わり) ・段階的に環境を設定したことで、始めは泥遊びに抵抗感がある子どもも少しずつ環境に慣れ、楽しむことができていた。 ・ご家庭から集めた廃材を多く用意したことで、豊富な玩具の中から一人ひとりがイメージを広げて選び、のびのびと遊ぶことができていた。 ・子どもたちと一緒に泥のプールに足を入れたり、ご飯に見立ててままごとをしたりし、発見した喜びや楽しさを共感し合いながら遊べるよう関わった。 ・子どもから使いたいものやしたいことの提案があった場合は、出来る限り準備し、イメージを表現できるようにした。	
3	取組概要		

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ⑥乳児クラス・幼児クラス (ねらい) ・自然物の音を聴いたり、鳴らしたりして遊ぶことを楽しむ。 ・どんぐりの音楽会を楽しむ。 (活動内容) どんぐりを見て、どんぐりマラカスや枝の木琴の音を聴いて遊ぶ。 (エピソード) ・ブラコップをジュースに見立て、おままごとへと発展している姿があった。 ・木の匂いを嗅ぎようとしていた。「きゅうり」と表現している子どもがいた。 ・どんぐりマラカスを積むことに夢中になっていた子どもがいた。普段、思い通りにならないことがあると激しく泣いてしまうが、友だちの肘がマラカスに当たって崩れても泣かずにもう一度積み直す姿が見られた。 (教育的効果) ・普段であれば“つかいたい”という思いから保育教諭の話よりも遊びに気持ちが向きやすいが、保育教諭の話にも耳を傾ける子どもが多く見られた。 ・物の取り合いが起きやすかったりする場面では、どんぐりを擬人化したことにより、親しみを持って大事に扱おうとする姿が見られた。 ・容器にどんぐりを一つ入れるだけでも、十分楽しんでる姿があった。自然物の玩具との出会いによって自ら遊びを展開していく姿が見られた。 (教材) ・どんぐりマラカスを人数分用意したことで、一人ひとりが思い思いに夢中になって楽しむことが出来た。 ・どんぐりに目をつけたことで、より親しみを持ちながら大きさや色、動きに注目して遊ぶ姿が見られた。 ・木の枝をそのまま置くよりも、枝同士を紐で繋げたことで、子どもが持ち上げる危険が減り、木によって違った音を楽しみやすくなった。また、枝の下に空間があったことで、音が響きやすくなった。 (場の設定) ・当日までに『どんぐりころちゃん』の絵本の読み聞かせや、園庭でのどんぐり集め、『どんぐりころころ』のペープサートを繰り返し楽しんだことで、どんぐりに親しみを持っていた。 ・どんぐりに目をつけ、1つの容器に1つのどんぐりを入れたことで、どんぐりそのものをよく観察する姿が見られた。 ・木の枝を数本ずつ結び付け、木琴のようにして、丸テーブルに並べて設定した。最初はテーブルを1つだけ用意していたが、11人の子どもの対して狭く危険だった為、2つに増やした。 ・ペープサートを行う際には、子どもが注目しやすい静かな環境で、棚を使って劇のように行うなど、保育室の中でも方法を工夫した方が良かった。 (子どもへの対応・関わり) ・どんぐりマラカスで遊ぶ際、「音が鳴るね」だけでなく「どんぐりがおしゃべりしてるね」という先生の声掛けがあったことで、子どもの興味が広がった。 ・子どもたちが感じていることを代弁しながら遊びに関わっていくことで、子どもたちの言葉を引き出すことに繋がっていくのだと感じた。 ・子どもの気づきや面白いと感じているものを保育教諭と一緒に楽しむことで、“あれがしたい”“これもしたい”と子どもたちの好奇心や興味が更に大きくなっていったように感じた。	  
---	------	--	---

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ⑦乳児クラス・幼児クラス (ねらい) ・お気に入りの落ち葉を見つけ、より自然物に親しみを持つ。 (表現) ・作ったものを友だちや保育教諭と共有して楽しむ。(人間関係) (活動内容) ・お気に入りの落ち葉を探して、お面ベルトやペンダントにする ・がるてんで自由に身体を動かして遊ぶ (エピソード) ・がるてんに入る前に、園庭でお気に入りの落ち葉を見つけ、陽の光に透かして色が変わることには気が付き、友だちと見せ合いを楽しむ姿があった。 ・ケロちゃんが落ち葉の布団を保育教諭にかける姿を見て、かりん組で育てている小カブの葉に、落ち葉をかける姿があった。「これであっかいね～」と喜んでいた。 ・落ち葉に穴をあけて顔を作ったケロちゃんの隣で、そのくり抜いた葉を違う葉に並べ、顔を作る姿があった。 (教育的効果) ・影遊び・風遊び・日向ぼっこなど、当日の自然現象を活かし、臨機応変に遊びに発展できたと感じた。 ・落ち葉だけでも、さまざまな大きさや色の種類があり、使い方もそれぞれで、十分楽しんでいる姿があった。保育教諭が問いかけたり、不思議を追求したりしていただけて、子どもたち自ら遊びを広げていた。 (教材) ・前日までの準備では、落ち葉の顔シールやベルト、メダルを用意した。 ・強風が吹いていた為、ケロちゃんの当日の助言でカラーボリのシートや袋の吹き出しを出して遊んだ。自然遊び用の玩具や物もあるので、その日の自然現象に合わせて、朝のうちに準備しておくことも大事だと感じた。 (場の設定) ・事前リスクとして、怪我やトラブルが起きないように、時間を調整してかりん組のみでがるてんを使用した。 (子どもへの対応・関わり) ・追いかけてこをしていた男児数人がレンガの隅に隠れて遊ぶ姿があり、危険だった。事前にかごや物を置き、塞いでおく必要があった。また、子どもたちに入らないよう丁寧に伝えていく。 ・落ち葉のお面をつけた保育教諭と追いかけてこをして遊んでいた子どもは、落ち葉に関心が無いと思っていたが、お面から落ち葉が剥がれると、「おちたよ」「これつけて!」と落ち葉を探す姿があった。身体を動かす遊びを楽しみながらも、自然物に興味を持てたこともいい気付きになった。 ・「さむい」と言って泣き出していた子どもには、友だちと落ち葉を集めて落ち葉の布団を掛けたり、日向を利用して暖かい場所で遊んだ。1月～2月にかけて、寒さで戸外に出て遊ぶことを嫌がる子どももいることが予想される。対応の仕方や遊び方の広げ次第で、子どもたちが十分に遊びこむことができると感じたので、寒さに負けず身体を動かして遊べるようにしていきたい。 ・普段、色々な遊びを考えていながら保育していることが多かったのも、普段見ることができない子どもの姿(気付きや子どもからの発信)に気づくことができてよかった。振り返りでは、子どもの姿や気付いたことを職員間で共有し、子どもの主体となる遊びを広げていきたいと感じた。	  
---	------	---	---

3 取組概要	(取組日) 令和8年1月 ～ 令和8年2月 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ⑧幼児クラス (ねらい) ・影や光に関心を持ち、自分なりに遊ぶことを楽しむ。 (活動内容) ・白い布とライトを使って、影シアター 影の動きを見て、何をしているのでしょうか？クイズや、この影は誰でしょうかクイズをする。 ・光テーブルで色水遊び マーカー色水(中にカラーセロファンやビーズなどを入れることも可)を光テーブルの上に乗せて、光の広がりを視覚的に楽しむ。 ・紙皿で光遊び 紙皿の中心をくり抜いたものに、カラーセロファンやビーズを貼りつけ、ライトで光をあて、角度によって影の映り方や、色の変化があることに気づき、楽しむ。 この環境の中で自分の好きなものを選んで遊ぶ。 (エピソード) ・紙皿の透明テープにスパンコールを貼り、ライトをかざして、白い布に照らすと桜の木に見える！ ・普段は、遊び込むのは苦手、ずっと片付けをしている。色水を作って、大人に発信。初めて自分から声を掛け、わくわくがとまらない姿を初めて見た。 ・布に影を写したり、床に写したりと、自分で色々試す様子があった。探求心が高まっていることが感じられた。 ・みんなが自由に、自分なりに遊びこんでいた。何もしなかったり、手が止まっていたりする子どもが1人もいなかった。 (教育的効果) 今日は部屋で光、影遊びを行った。さくら組の子どもたちの姿として、完璧主義な子どもが多く、自由にやっていいよと言っても、大人の求める正解を考えて、周りの様子を伺ったり、完璧を求めすぎて、固まってしまう子どもがとて多かった。しかし、今日は全員がそれぞれの思い思いに、迷うことなく光と陰で、伸び伸びと楽しんでいた。今日の1時間だけでは子どもたちの探求心やわくわくする気持ちは止まらず、もっとやりたい！という子どももたくさんいたため、明日以降も継続的に遊び、光や影への関心をより深めていきたい。 (教材) 白い布・光テーブル・ペットボトル(小さめのもの)・白のすずらんテープ、水性マーカー、紙皿×透明テープ、カラーセロファン、スパンコール (場の設定) コーナー遊び ・室内のカーテンを閉めたり、電気を消して、光や影が見えやすい環境にする。 ・影絵シアター 布を吊るし、後からライトで光を当て、影が映るようにする。 ・光テーブル遊び、紙皿製作 (子どもへの対応・関わり) ・コーナー遊びでは、自分が使った後に使う人のことを考えて、都度環境を整えながら遊ぶことを伝えていく。 ・1人の子どもの気付きはみんなに共有して、楽しめるようにする。 ・混乱なく遊び込めるよう、どこで何を作れるのか、遊べるのか、がはっきりわかるよう、机ごとで分け、コーナーをはっきりとさせる。 ・子どもたちから、追加で欲しいもの、やりたいことなど発信があった場合、可能な限り準備をし、探求心を深め、遊びの発展へと繋げていく。     
--------	---

		(取組日) 令和8年1月 ～ 令和8年2月 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ⑨乳児クラス (ねらい) ・自然物を入れた氷の冷たさや日向の温かさを感じる。(環境) ・温かさや冷たさを感じる中で、保育教諭や友だちと会話を楽しむ。(人間関係) (活動内容) ・がるてんで、日陰や日向などの様々な所を触り比べながら温度の違いを楽しむ。前日に水を張ったカップや銀のトレイを設置し、凍ることに期待を持つ。 (エピソード) ・一人の男児が温かいお湯が入ったボトルを持っていた際に、温度を下げようとしていたのか、キャップを少し開けて振る姿が見られた。 ・事前に絵本で『あたたかい』『つめたい』という言葉や場面を見たことで、外に出た際に子どもたちからウッドデッキはあたたかく、鉄の柱は冷たいことに気付いている様子があった。 ・木の机に水が付くと色が変わることを知ったことをきっかけに、まっぼっくりを水につける遊びに発展できていた。 ・水が入ったボトルを横向きにして、目に当てて「はいちーず！」とカメラのレンズの様に遊んでいた。 (教育的効果) ・準備されたものだけではなく、その時に身近にある自然物(芝や枯れ葉)を使った遊びを取り入れたことで遊びが発展できたと感じた。 ・日陰は冷たい、太陽に当たっているところは暖かいという自然の営みを子どもたち自身で感じている姿があった。保育教諭がそれを見守り、必要に応じて言葉かけをしたことで探求心が芽生えていた。 ・限られた教材を友だちと順番で使ったり、取り合いになってしまったりする場面があった。 (教材) ・前日までの準備では、銀トレイやカップに花や松ぼっくりを入れたものを、凍るようにがるてんに設置した。以前凍った場所に一晚置いたが、気温が下がらず凍らなかった。 ・ケロちゃんからの助言で毛布と段ボールの囲いを用意した。 ・ボトルに入ったお湯や水を出したことで容器を使いたがる子どもが多く、人数に対して教材の数と量が少なくなるということがあった。様々な姿を予想して準備しておく必要があったと感じた。 ・がるてんに設置した『お家』は、毛布を敷き、囲いを設置したことで多くの子どもがくつろぐ場所だと認識をしていた。一方で、囲いの高さが低かったことで境界が曖昧になり、靴下や裸足のままで外に出てしまう子どもの姿が見られた。その都度靴下で遊ぶことがなぜ危険なのかを伝えつつ、よりお家だと認識しやすいようなものを設置していきたい。 (場の設定) ・怪我やトラブルが起きないように、事前に各クラスと話し合いかりん組のみでがるてんを使用できるようにした。 (子どもへの対応・関わり) ・出発前に「てのひらおんどけい」の絵本を読んだことで、がるてんに行く道中に自ら色々なところを触り「あったかい！」「ここはつめたいよ」と伝える姿が見られた。保育教諭が何も伝えなくても自ら感じ取ろうとする姿から、子どもの気付きや観察力が育っているように感じたため、今後も園内散歩等で取り入れていきたい。 ・水やお湯を準備していたことで、枯れた芝やお花を使っておままごとをする姿が多く見られた。その中で、水分を含むと芝が固まることに気付く子どもが多かった。 ・冷え込む日が多くなり、普段は戸外遊び中に「さむい」と屋内に入りたがる姿があるが、温かいお湯や日向に作った毛布のお家などで温まる機会が多くあったからか、今回は入りたがる姿は少なかったように感じる。 ・濡れた手で芝を触っていた子どもが、手に付くのを嫌がり手を洗いにいきたい姿が見られた。また、お家の絨毯を片づける際に芝が目に入りかけた姿もあったことから、保育者が芝のついた絨毯の取り扱いに注意する。   
--	--	---

3	取組概要	(取組日) 令和8年2月1日 ～ 令和8年2月7日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ⑩ 幼児クラス (ねらい) ・一年をふりかえって、季節の自然物や事象など、季節の特徴や移り変わりを理解する (活動内容) ・一年間の自然遊びで作った様々な作品を子どもたちが主体的に飾る。 (エピソード) ・作品を見て、その当時の気候(寒い・だんだん暖かくなった・暑かった・気持ちよかったなど)、園庭に咲いた花、実った果実、紅葉の様子など、園で過ごすにあたって身近な存在・事象を思い出し、友だち同士で思い出を話し合う姿が見られた。 (教育的効果) 自然素材を使った作品を見て、その季節の特徴をあらためて理解したり、移り変わりを実感できた。 ・生活の中での実体験と季節がつながるなど、より興味関心を引き出すことができた。次の季節(春)への期待感を持てるようになった。 (教材) ・過去に作った作品。 ・長期保存できないものは、保育教諭や子どもたちでデジタルカメラで撮影し、印刷をして展示した (場の設定) ・1週間かけて、各保育室、ひろば(遊戯室)。デッキテラスなどに、園児が作品を飾れるよう、テーブルなどを配置した。 ・室内に紐を吊るして細工品を飾れるようにした。 (子どもへの対応・関わり) ・すべてのクラスの作品を見て、クラスや異年齢の作品を見て、特徴を話し合う機会を持った。 ・見に来てくれる人(保護者)のことを考えて、作品を丁寧に飾ること、またどのように飾ればより作品が映えるかなど、見る人のことを考えた。	  
		(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	

効果検証報告書（継続事業用）

施 設 名	幼保連携型認定こども園葛飾二葉幼稚園				
教 育 理 念	「自立と思いやりの心」を育てる				

事業の区分(5領域)	幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)				
	健康 ○	人間関係 ○	環境 ◎	言葉 ○	表現 ○
1 事業名	「身近な自然を保育に取り入れる」				
2 事業概要	自然保育コーディネーターのウレシパモシリ代表の高橋京子先生をはじめ、ウレシパモシリのスタッフ3～5名をゲストティーチャーに、「身近な自然を保育に取り入れる」をテーマに、身近な自然がいっぱいの当園の園庭をフィールドに、乳幼児クラス14クラス(1～5歳児)に、四季折々の園庭の自然を取り入れながら、ゲストティーチャーや担任が連携しながら自然保育を行う。 年間を通して子どもたちが自ら体験できるように、定期的なゲストティーチャーの来園日のみではなく、オンラインによりミーティングも活用し研修や振り返り、課題の整理案等をミーティングにて行い、1年を通した取り組みを実践する。				
3 対象学級(クラス名) 対象人数	(クラス名:いちご、かりん、うめ、あやめ、ひまわり、あじさい、きく、さくら、すずらん、もも、すみれ、ふじ、ばら、ゆり)			380 名	
計画時	4 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況 ウレシパモシリ ゲストティーチャー3～5名 乳児クラス幼児クラス担任、フリー教諭、主任			
	事業後	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 年間を通して研修ミーティング(対面)、及び適宜オンラインでのミーティングを行うことによって、当月もしくは季節の振り返り、次の目標を明確にすること、日常の活動をより豊かにするために、季節や天候に応じて様々な活動プログラムを用意して経験を積めるようにした。 ゲストティーチャーが複数いることで、よりコーナー活動を豊かにすることができたこと、振り返りでは様々な意見や、子どもたちのエピソードを共有することができた。		
計画時	5 事業のねらい	1つとして同じものがない自然が持つ多様な存在が、子どもたちの五感を揺り動かし、豊かな感受性を育み、興味関心(知的好奇心)を抱くことへとつながっていきます。子どもたちは様々な発見(気づき)からそこに深く関わり、そこには『対話的で深い学び』が生まれます。 また、子どもたち一人ひとりの気づきからは、自然と同様に、1つとして同じものがない個性豊かで優劣の無い作品が生まれます。 『「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない』。(「センス・オブ・ワンダー」)この言葉は、幼児期にとって、とても大切な言葉です。 身近な自然を取り入れた保育の中にある教育的価値を教職員皆で再確認し、二葉幼稚園の保育教育の柱となることを目指します。 身近な自然と関わることで、主体的・対話的で深い学びを実現し、「5領域」・「10の姿」を意識した活動になることを狙いとします。 今年度は、乳児クラスの体験も重視し、自然の不思議や面白さに触れる機会を設けて、幼児クラスでのより自然との深い関わり方、楽しみ方につながるように計画した。			
	事業後	5についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 身近な自然が持つ多様性に触れることで、子どもたちの五感により敏感になり、さまざまな興味関心を引き出すことができた。それと同時に、自然素材の持つ多様性が表現の多様性を生み、より豊かな言葉を引き出し、より多様な人間関係を築きかけともなった。画一的な教材とは違い、多様な作品が生まれることによって、優劣がなく、自己肯定感にもつながっている。 なによりも自然が持つ多面性が、子どもたちのなぜ? どうして? の心を育て、深く関わる経験を生んでいる。 更に、子どもが感じて主体的に考えて行動できたことで、それを引き出すための保育環境(モノ・コト・ヒト)を保育教諭が主体的に創造し、「保育って楽しい!」と思える様なきっかけとなった。 乳児クラス(1・2歳児)でも、年間を通して活動を計画したことで、体験・経験の連続性を考えて、一時的な体験に終わらないように、数年間を通してのねらいを持ち、子どもたちの成長を考えることができた。		

計 画 時	6 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 身近な自然がテーマなので、1年を通して、その時期その時期に合った内身近なテーマを設定した。主なテーマは○草花 ○雨・水 ○落ち葉 ○光・影・風 ○土・砂と、園庭にある身近な自然素材を利用した。それによって、ゲストティーチャーとともに体験した活動を、日々の園生活の中で、年間を通して楽しめるようにした。 乳児クラスでも、手や肌で自然物の感触(暖かい、冷たい、ツルツル、ザラザラなど)をたくさん感じて楽しむ音ができた。 上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点 園庭に存在する身近な自然として・草花(花びら・種・葉)、・樹木(枝、幹、葉、落ち葉・実)、・雨(雨、しずく、水たまり)、・土(園庭の土、砂、畑の土)、光と影(陽、木漏れ日、ライトテーブル)、風、氷などを教育的資源と捉え、遊び、ゲーム、製作などの活動の中で、気づき、発見、興味関心を引き出し、知的好奇心や、科学の種を育て、自己肯定感を育む。その中で共同、協同、協働の経験していく。 (継続事業のみ記入)前年度の取組から発展させた点 幼児クラスで、より身近な自然に、主体的、かつ対話的で深いかかわりを持つためには、なによりも自然に特別な意識を持たずに触れることが重要と考え、今年度は、幼児クラスだけではなく、その土台を育むために乳児クラス(1、2)にも、年間を通した体験を考えた。 乳児クラスでの体験が、幼児クラスに進級したときに、より自然と深く関わり、楽しむ心(興味関心)を育み、遊びの質を高められると考えている。
	事業後 6についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 保育教諭が教える。教え込むのではなく、豊かな自然環境の中で、子どもたちが身近な自然に気づき、興味関心を抱くことから始まり、自然が持つ多様に触れることで、どの子どもにも、その子なりの気づきや発見、疑問、満足感が得られたこと。子どもの関心や疑問が次から次へと湧き出て、目の前の自然や自然事象に深く関わるようになった。 子どもの心の変化・興味関心のありかを保育教諭がより気づき、その言葉を拾えるように、エピソードの共有や、段階(年齢)を意識していきたい。
計 画 時	7 環境構成例	子どもたちや保育教諭が集めた自然素材を、分類・保管できるように、園舎内に自然素材コーナーを設置して、子どもたちが自由に製作に使用できるようにした。 また保育室に移動できる可動ワゴンを置き、その中にも自然素材を収納して、保育室内であっても、身近な自然を取り入れた活動を行えるようにした。 園庭にも木製のテーブルとベンチを用意して、普段保育室で行っている活動をそのまま園庭でも行えるようにした。 その他、四季を通じて、○草花 ○雨・水・氷 ○枝・葉・実、落ち葉 ○光・影・風 ○土・砂を楽しめるように、樹木の管理、また、新たに樹木を植え、葉の色や形にさらにバリエーションを楽しめるようにした。
	事業後 7についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 園舎内に設置した自然素材コーナーでは、こどもたちや保育教諭が集めた自然素材(どんぐり、小枝など)を自由に使えることで、進んで製作に使用する姿が見られ、多様な作品が生まれた。 同様に自然素材を収納し保育室間を自由に移動できる可動ワゴンは、「アトリエワゴン」と名付けられ、保育室内であっても、身近な自然を取り入れた活動を行えた。 園庭に配置した木製のテーブルとベンチでは、普段保育室で行っている活動(製作やゲーム、読み聞かせなど)に、自然物や自然事象(風や光、しずくなど)を取り入れられた。 身近な自然に触れる環境としては十分と考えるが、さらに多様性を持たせるために今年度は樹木の種類(トウカエデ)を増やした。それによって葉の形、色が多彩になり、子どもの遊びや造形絵画表現が豊かになった。 今後は、こどもたちが自然素材(どんぐり、小枝など)を集めるだけではなく、細かく分類(遊び)ができるよう環境を考えていく。

計画時	8 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 保育教諭が自然に触れる姿を見せることで、子どものロールモデルとなる。 身近な自然との触れ合いを通して、五感を豊かにする。 季節の変化に気づき、身近な自然を遊びに取り入れる。 手や指先や肌で感触や温度を、目や鼻や耳などで、自然物・自然事象の変化や違いに気づいたり、自然の不思議を感じたりする。 同じものに興味を持った子どもたちが関係性(言葉・協力。お互いを認め合うなど)を深める。 動植物に親しみ、いたわったり大切にしたりする心を育む。
	事業後 8についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 はじめは保育教諭の様子を見たりしながら、自ら自然に関り、その変化・違いに気づき、それを楽しむ姿が見られた。触れて、見て、臭いを嗅いで、少しずつ深く関わろうとする姿に発展し、いろいろな“試してみる”“工夫しようとする”といった遊びに広がっていった。さまざまな友達関係が生まれたり、深まったり、複数での活動は、活動の幅がより広がり、質の深い遊びに発展した。
	9 効果検証総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 自然を取り入れた保育では、子どもたちは、自らいろいろな遊びの中で十分に体を動かし、晴れの日はもちろん、雨の日であっても進んで戸外で遊びます。 自然の中での気づきや発見を、保育教諭や友達と喜び、遊びに取り入れることで、自分で考え、自分で行動し、友達とも積極的にかかわることで、共同、協同、協働が生まれます。自分が感じたことを言葉で相手に伝えたり、相手の発見を聞いてとても喜んだり、一緒に活動する楽しさを味わいます。 様々な素材に触れて楽しみ、様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむなど、様々な出来事に触れ、イメージを豊かに膨らませていきます。 身近な自然を取り入れた保育では、5領域に深く関係し、“遊びは学び”を実現して、小学校の自覚的な学びにつながっていくと考えます。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。